

緑が丘中学校 三者（生徒・保護者・教職員）アンケートの統合分析

分析の対象

分析の対象は、以下の 3 つのアンケート調査結果

- **生徒アンケート**：学校生活の満足度、学習意欲、自己肯定感など、生徒の内面的な視点。
- **保護者アンケート**：家庭から見た生徒の様子、学習環境、学校との連携に関する視点。
- **教職員アンケート**：教育活動の実践者としての自己評価、組織運営に関する視点。

統合分析の要約：3 つの視点から浮かび上がる全体像

生徒・保護者・教職員の 3 つの視点から得られたデータを統合した際に浮かび上がるマクロな傾向を提示します。分析の結果、緑が丘中学校は、全関係者に共通する強みとして「**堅固な学校文化と安全性の基盤**」を有していることが明らかになりました。一方で、3 つのデータは共通して「個へのアプローチの深化」と「双向コミュニケーションへの進化」という、次なる成長ステージに向けた課題領域を指し示しています。

1. 教育活動の成果（強み）

これまでの教育活動において、特に顕著な成果が得られているのは以下の 3 点です。

- 「いじめを許さない」安全な校風の確立

教職員アンケートでは、「いじめを許さない一貫した姿勢」が 100% の肯定評価を得ており、組織全体でこの価値観が完全に共有されています。生徒・保護者からも学校の健全な雰囲気や通学意欲に対して極めて高い評価（保護者評価 90.3%）が得られており、学校が「安心して過ごせる場所」として機能していることが最大の成果です。

- キャリア教育の進展と学習習慣の定着化

生徒アンケートにおいて「将来について考えることができた」という回答が +3.9 ポイントと大幅に上昇しました。この将来への意識の高まりに伴い、家庭学習の習慣化（生徒肯定率 +3.7 ポイント）も進んでおり、キャリア教育が学習動機付けに寄与していることが伺えます。

- ICT 活用の定着と情報発信の充実

教職員の ICT 活用率は 96.30% と極めて高く、授業の現代化が進んでいます。また、保護者への情報発信（ホームページやマチコミ等）についても 92.5% という高い肯定評価を得ており、学校の様子を可視化する取り組みが信頼関係の基盤となっています。

2. 次年度に向けた課題（弱み）

分析の結果、次年度の計画で重点的に改善すべき課題が4点浮き彫りになりました。

- **生徒の意識の「二極化」と「内向化」への対応**

学校生活全般において、強い肯定層が増える一方で中間層が減少し、肯定層と否定層の「二極化」が進む兆候が見られます。また、「周囲への相談」や「学校行事を通じた成長実感」が低下しており、生徒の関心が集団活動から個人の内面や学外へと向かう「内向化」が進行しています。

- **個別最適な学びと学力格差への対応**

教職員の自己評価において「学力下位層への手立て(77.78%)」や「家庭学習の改善(62.97%)」は低評価に留まっています。保護者からも「一人ひとりに対応した授業」への否定的な声(27.5%)や、授業進度の速さ、欠席時のフォロー不足を指摘する具体的な意見が寄せられており、集団指導における個別最適化が急務です。

- **「相談のしやすさ」の低下とコミュニケーションの質の転換**

保護者アンケートでは「相談のしやすさ」が-5.7ポイントと顕著に低下しました。これは、学校からの質の高い情報発信により保護者の期待水準が上がり、単なる情報の受け取りではなく、より双方向で個別化された対話を求めるようになった「成功のパラドックス」が生じているためと考えられます。

- **教職員の業務効率化とウェルビーイングの両立**

教職員の連携体制や情報共有は円滑(92.59%)である一方、「勤務時間を意識した業務の工夫」の肯定評価は77.78%に留まっています。強固なチームワークを、単なる情報共有だけでなく、実質的な業務負荷の軽減や生産性の向上にどう繋げるかが問われています。

テーマ別クロス分析：データが語る緑が丘中学校の実態

テーマ1：学習意欲と学習環境

関連データの比較表

指標	データソース	R6 年度	R7 年度	変化/現状
主体的な授業への取り組み	生徒アンケート	89.9%	88.9%	-1.0 pt
家庭学習への取り組み	生徒アンケート	62.2%	65.9%	+3.7 pt
家庭学習への取り組み	保護者アンケート	68.2%	64.9%	-3.3 pt
家庭学習改善への取組	教職員アンケート	-	62.97%	全項目中最低評価
学力下位層への手立て	教職員アンケート	-	77.78%	課題評価
個別実態に応じた授業	保護者アンケート	79%	73%	-6.0 pt
ICT の積極的活用	教職員アンケート	-	96.30%	非常に高い評価
「個別最適な学び」の意識	教職員アンケート	94%	82%	-12.0 pt

分析と評価

- 家庭学習のパラドックス

生徒（意欲向上）、保護者（評価低下）、教職員（取組への自己評価が極めて低い）の間で、「家庭学習」に対する認識が完全に乖離しています。これは単なる数値の違いではなく、「何を」「どれだけ」「どのように」行うことが適切な家庭学習なのかという期待値や定義そのものにズレがあることを示唆します。この認識のズレが、効果的な連携を阻害している最大の要因と考えられます。

- 個別化のパラドックス：ツールと実践の断絶

教職員のICT活用スキル（96.3%）は極めて高い水準にあります。しかし、そのスキルが必ずしも「個別最適な学び」の実現には結びついておらず、教職員自身の「個別最適な学び」への意識（82%）や、保護者の「個別実態に応じた授業」への評価（73%）は伸び悩んでいます。

- 意欲のパラドックス

生徒の「将来への意識」が大きく向上しているにもかかわらず、「主体的な授業への取り組み」が微減している点は重要な示唆を与えます。これは、生徒のモチベーションの源泉が「未来への憧れ」という抽象的なレベルに留まり、日々の「学習タスク」という具体的なレベルにまで浸透していないことを示す重大なシグナルです。

テーマ2：学校生活の満足度と心の育成

関連データの比較表

指標	データソース	R6年度	R7年度	変化/現状
学校が楽しい	生徒アンケート	86.5%	84.4%	-2.1 pt
学校生活の充実感	生徒アンケート	92.1%	90.2%	-1.9 pt
自分にはよいところがある	生徒アンケート	83.7%	85.7%	+2.0 pt
学校行事での成長実感	生徒アンケート	94.0%	92.3%	-1.7 pt
明るく元気に通学	保護者アンケート	90.2%	90.3%	+0.1 pt
いじめを許さない姿勢	教職員アンケート	-	100.00%	完全な合意
いじめ防止意識	生徒アンケート	97.0%	95.5%	-1.5 pt

分析と評価

- 満足度の二極化

生徒の「学校が楽しい」「充実感」といった項目は肯定率が微減していますが、その内訳を見ると「そう思う」という強い肯定層は増加しています。これは、生徒の満足度が「二極化」しつつある兆候です。大多数の満足している生徒がいる一方で、満足できていない一部の生徒とのギャップが拡大している可能性があり、画一的なアプローチでは対応が難しくなっていることを示唆します。

- 自己肯定感の源泉の変化

生徒個人の自己肯定感 (+2.0 pt) 「学校行事での成長実感」個人的な領域へとシフトし始めている可能性を示唆しています。

- 安全基盤の確立

教職員の「いじめを許さない姿勢」が 100%という完全なコミットメントを示している点は、緑が丘中学校の最大の強みです。この断固たる姿勢は、生徒自身が持つ高い「いじめ防止意識 (95.5%)」や、保護者が実感する「子どもが明るく元気に通学している (90.3%)」という状況に明確に反映されており、全ての教育活動の前提となる物理的・心理的安全性を確立しています。この揺るぎない基盤があるからこそ、他の課題に取り組むことが可能となります。

テーマ3：学校と家庭・地域との連携とコミュニケーション

関連データの比較表

指標	データソース	R6 年度	R7 年度	変化/現状
学校の様子が伝わっている	保護者アンケート	94.3%	92.5%	-1.8 pt
相談のしやすさ	保護者アンケート	84.1%	78.4%	-5.7 pt
周囲への相談	生徒アンケート	86.1%	84.2%	-1.9 pt
家庭との連携	教職員アンケート	-	92.59%	
情報の共有（教職員間）	教職員アンケート	-	92.59%	

分析と評価

- コミュニケーションのパラドックス：成功の罠

保護者アンケートでは、学校からの「情報発信 (92.5%)」への高い評価と、「相談のしやすさ (-5.7 pt)」の顕著な低下という、一見矛盾した結果が示されました。これは「成功の罠」と解釈できます。学校からの質の高い情報発信が、保護者の学校への関心と期待水準を引き上げ、その結果、保護者は単なる情報受信者から、より双方向の対話を求める能動的なパートナーへと意識を変化させた可能性が高いです。学校は、自らの成功によって生み出された新たな期待に応える必要に迫られています。

- 内向化の傾向

生徒の「周囲への相談」意識の低下と、保護者の「相談しやすさ」の低下は、運動した動きとして捉えるべきです。これは、学校コミュニティ全体で悩みを内側に抱え込む「内向化」の傾向を示唆する危険なシグナルかもしれません。

総括：緑が丘中学校の成果（強み）と課題（弱み）

成果と課題の明確化

これまでのクロス分析の結果を統合し、緑が丘中学校の組織的な強みと、今後の成長のために取り組むべき戦略的課題を明確に要約します。強みをさらに伸ばし、課題を克服することが、次なる発展の鍵となります。

成果（強み）の体系的整理

- **【強み 1】全教職員に浸透した、いじめを許さない断固たる姿勢と高い規範意識**
教職員アンケートで 100% の肯定評価を得た「いじめを許さない姿勢」は、本校の最も価値ある資産です。これは、生徒・保護者の高い安心感に直結しており、全ての教育活動の根幹を成す心理的安全性の基盤となっています。
- **【強み 2】生徒の未来を拓く、効果的なキャリア教育の実践**
生徒アンケートで +3.9 ポイントという最も大きな伸びを示した「将来を考える意識」は、キャリア教育の明確な成功を示しています。生徒の内発的動機付けに繋がるこの成果は、今後の学習意欲向上のための重要なドライバーです。
- **【強み 3】ICT 活用と情報発信を軸とした、安定した組織運営基盤**
教職員の ICT 活用スキル (96.3%) や家庭との連携意識 (92.59%)、保護者からの情報発信への高評価 (92.5%) は、学校が変化に対応できる安定した組織運営基盤を持っていることを示しています。

課題（弱み）の体系的整理

- **【課題 1】多様化する生徒への「個別最適化」の遅れ**
保護者からの「個別実態に応じた授業」への評価低下 (-6.0 pt) や、教職員が課題と認識する「学力下位層への手立て」(肯定的評価 77.78%) に表れているように、生徒の多様なニーズに対する個別のアプローチが追いついていない状況です。
- **【課題 2】「発信」から「双方向の対話」へのコミュニケーションの深化**
保護者の「相談しやすさ」の顕著な低下 (-5.7 pt) や、生徒の「周囲への相談」意識の低下 (-1.9 pt) は、これまでの情報発信中心のコミュニケーションから、個別の声に耳を傾ける双方向の対話へと、関係性を深化させる必要性を示しています。
- **【課題 3】「家庭学習」における生徒・保護者・教職員間の認識のズレと連携不足**
三者間で評価が完全に乖離している「家庭学習」は、連携不足の象徴的な課題です。共通の目標設定や具体的な方法論が共有されないままでは、各々の努力が空回りしてしまうリスクがあります。